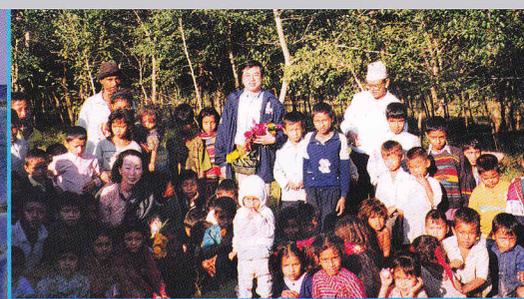


寄せられた浄財とボランティア活動で ネパールにこども病院を建設

兵庫県立こども病院 ^{むらじ} 連 利博外科部長に聞く

今年8月、ネパール・プトワール市近郊に、日本で集められた浄財により、母子のための病院が完成しました。ボランティア・グループAMDA（アムダ：アジア医師連絡協議会）と、毎日新聞社の社会事業団、現地のプトワール市の人々の協力で完成したものです。病院の完成を心待ちにしていた多くの人の中に、兵庫県立こども病院・外科部長の 連 利博先生がいました。ネパールのラメッシュワール・ポカレル医師との出会いがきっかけで、病院建設に深く係わってきた連先生にお話をうかがいました。



ネパールの医師の思いに寄せられた善意

AMDAネパール支部長でもあるポカレル医師が、小児外科の勉強のため神戸大医学部に留学で来日したのは1992年。5年間の留学中、1996年には兵庫県立こども病院に1年間派遣され、連先生から小児外科手術を学びました。「ポカレルさんから、資金はないけどネパールに母子のための病院をつくりたいという話を聞かされたのは、そのころでした。夢のような遠大な計画だとは思ったものの、協力してくれる団体や企業がないか、あちこちに当たってみましたが、無駄でした」と連先生。



外科部長 ^{むらじ} 連 利博 先生

ネパールでは、新生児死亡率が10.5%（日本は0.4%）、さらに毎年4万人を超す5歳以下の子どもたちが下痢・嘔吐をとまなう疾患で死亡しているそうです。そのほとんどが予防も治療もできる疾患なのに対し、ネパールには150床の小児病院がカトマンズにひとつあるだけ。このような現状をなんとかしたいと、ポカレル

医師は常々思っていました。そんな折、AMDA日本支部で開かれた表彰式にAMDAネパール支部長として出席したポカレル医師は、取材で訪れた毎日新聞の記者にこども病院建設への思いを熱っぽく語ったのです。

毎日新聞では、長年にわたり「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」を新聞紙上で続けていましたが、ポカレル医師の話がきっかけとなり、キャンペーンの一環として、1996年7月、ネパールの子どもの窮状が「明日を生きたい」というタイトルで連載されました。

連載後、わずか1週間で1000万円を超す寄付が毎日新聞社に寄せられました。とくに阪神地区の読者からは「震災を体験した私たちにとって、他人事とは思えません」と、その後も続々と寄付が集まり、一人一人の小さな善意の積み重ねは、ついに3000万円に達し、ポカレル医師の夢だったこども病院建設が可能になったのです。

医療機器の提供、スタッフの派遣も

資金が集まると、AMDA日本支部とAMDAネパール支部、毎日新聞社社会事業団が中心となって、こども病院建設委員会準備会が開かれ、ボランティア・グループAMDAを岡山県で発足させアジアにまで運動を拡げたAMDA日本代表の菅波茂先生の熱心な勧めで、連先生もこども病院建設プロジェクトの日本側責任者として、AMDAの一員に加わることになりました。

同時に、建設候補地さがしが始まり、ネパール南西部のルンビニ州の州都であるプトワール市なら、現地の積極的な協力が得られるうえ、ネパール西部に住む約40万人以上の人々の医療が可能になることがわかり、プトワール市郊外のディーブナガル村に建設することが決まりました。

1996年11月、連先生をはじめとする関係者がプトワール市を訪問し、AMDA日本支部、AMDAネパール支部、毎日新聞社、プトワール市の四者が病院建設に合意。プトワール市が道路・水道などの基礎整備工事を行うことになりました。土地は7ヘクタールの国有地が確保され、1997年から工事が始まり、2階建て・延べ床面積1000m²の病院が2000万円の費用で、今年8月に完成したのです。

「合意が成立し建設予定地を見学したときのことです。現地には子どもたちを含めて100人余りの村人が集まっていました。その身なりは貧しいものでしたが、私たちが建設予定地を歩きはじめると、村人たちが一輪・二輪の花を手プレゼントしようと押し寄せてきました。ありがたくいただきましたが、あっという間に両手が花でいっぱいになり、あまりの感動に思わず立ちつくしてしまいました」と、連先生はボランティア活動ならではの感激にひたれた喜びを話してくれました。

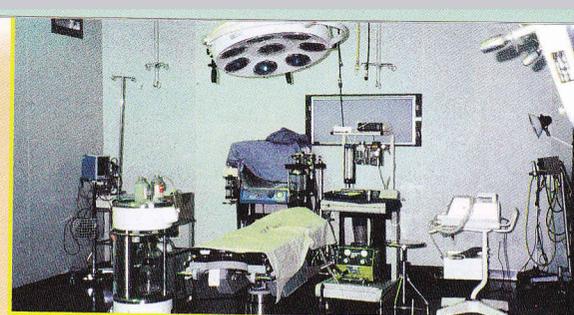
大切な感動を胸に病院の完成を喜び一方で、連先生は病院運営の仕事に追われます。「残りの費用で医療機器を購



手術室看護婦 ^{だんの} 段野 由里さん



カンティ小児病院
中央/総婦長さんと
段野さんは右から3人目



カンティ小児病院
手術室

入し、現地に送ります。でも、まだまだ足りなくて、中古の手術器具でも提供または寄贈して下さる方をさがしています。新しい病院ではポカレルさんが院長になり、医師・看護婦などのスタッフを現地で集めていますが、日本からもスタッフを一人でも多く派遣したいと考えています。7月中旬、元看護婦の富田さんが総婦長としてネパールに出発しました。富田さんは5年前にネパールに渡り、JICA指導員としての医療経験を持ち、ネパール語も話せます。

ネパールでは英語とネパール語が通じますが、日本で勉強した医師や看護婦は片言の日本語を話しますし、富田さんが総婦長でいますから言葉の壁はそれほどないと思います。短期間でもこのプロジェクトに参加したいという方をさがしていますが、医療機器やスタッフを集めるのに大変苦労しています。どなたか協力して下さる方はいないでしょうか」と、連先生は訴えます。このように医療機器やスタッフの援助を行うとともに、AMD A日本支部では、病院の自立を願うため5年間と期限を定めて運営資金の援助を行うことを決めています。

文化・習慣の違いを乗り越えて



神戸市須磨区にある兵庫県立こども病院は、東京の国立小児病院について全国で2番目にできた公立小児専門病院で、28年の歴史があります。

また1985年には日本で最初の専用手術室を使用したヘルニアの日帰り手術を行い、現在は年間1200例余りの外科手術が行われていますが、その半数を占めるヘルニア手術のほとんどが日帰り手術になっています。

連先生は、昨年9月にはネパールの仮医師免許をとって、カトマンズのこども病院に手術指導に出かけました。兵庫県立こども病院の9人の看護婦もネパールの医療現場の見学のため同行しましたが、連先生はじめ看護婦も有給休暇をとってのボランティア参加です。

「トイレの不備な所が多く、衛生面で問題がありました。そのため寄生虫による病気や、マラリア・赤痢などの感染症の病気が目立ちますね。また、食道の内視鏡手術、開腹しての胃の腫瘍切除、ヘルニア手術、頸部瘻孔、鎖肛などの手術を、滞っていた2週間のあいだに手掛けてきましたが、出かける前にエチコンから縫合糸をいっぱいいただき、カバンに詰めていったのが大いに役立ちました。向こうにも糸はあったのですが、3年くらい前に有効期限が切れたもので、持って行ったエチコンのPDS*などを見て、現地のドクターはとても喜んでいました

よ」と、連先生は語ります。同行した看護婦の段野由里さんは、看護学校在学中から青年海外協力隊にナースとして行きたいと考えていたほど、海外での医療活動に関心を持っていた看護婦。病院内の掲示板に連先生が出したネパールの病院見学募集のチラシを見て参加した一人です。

「カトマンズのこども病院では、病院の雰囲気は日本と変わらないのですが、衛生に対する考え方はかなり違います。またカースト制度のため、院内の掃除や患者の身体を拭くなどの仕事は、私の役目ではないと考える看護婦もいるようです。病室に行くと、こども病院でも大人のベッドが置いてあるのですが、介添えに来ているお父さん・お母さんが子どもと一緒にベッドに寝ていて、だれが病人なのか分からないほどです」と、段野さんは文化と習慣の違いに驚いていました。

ネパールでの医療援助の体験も積んだ連先生は、今後について次のように語りました。「向こうには小児看護のマニュアルがないので、ネパールに同行してくれた看護婦を中心に、日本語・英語・ネパール語のマニュアルづくりを急いでいます。また、衛生面の改善をはじめ学んでほしいことがいっぱいあるうえ、5年で病院運営を軌道に乗せるため、できるだけ現地に出かけ指導していきたいと思っています」

このように力強く語る連先生の表情には、フトワールこども病院への意欲と情熱がみなぎっていました。

フトワールこども病院では、プロジェクトに参加して下さるスタッフ、中古の医療機器・手術器具を求めています。プロジェクトへの参加、機器類の提供・寄贈をお願いできる方は下記へご連絡ください。

神戸市須磨区高倉台1-1-1

兵庫県立こども病院 連 利博 外科部長

TEL 078-732-6961 FAX 078-735-0910



連 利博 (むらじ としひろ) 外科部長

昭和50年関西医科大学卒業。横須賀米国海軍病院で1年のインターンの後、1985年まで兵庫医科大学第一外科。その間1981年から2年間、ロサンゼルス小児病院・トロント小児病院へ留学。1986年兵庫県立こども病院外科へ。1995年外科部長。

段野 由里 (だんの ゆり) 手術室看護婦

開業医で4年間勤務の後、1992年兵庫県立こども病院へ。今年2月から手術室看護婦。